

グローバル化時代の公共空間と知の形成

—近代合理主義と仏教についての覚書—

丸 山 哲 央

はじめに

われわれは往々にして現在の時点をこれまでにない画期的な時代として捉えがちである。それは、社会の変化や変動を測る基準が多種多様であり、人間の社会が絶えず何らかの変化の中で動いているからである。ところで、現在われわれが生活している21世紀初頭の世界はどのような「新しい時代」であるのか。

20世紀後半から21世紀にかけて、人類社会は本質的な意味において画期的な変貌を遂げてきたといえる。歴史的な時間軸について考えるならば、それは、かつて前近代社会から近代社会への移行という「近代化」に匹敵するような変化、つまり近代の新しい局面への転換である「脱近代化」という現象をみてとることができる。

近代化については多元的かつ多様な規定がなされてきたが、その核心をなすものとして合理主義的な理念の浸透ということが挙げられる。合理主義に基づく科学技術の発達は産業革命を招来し、その結果生産力が増大し物質的な豊かさがもたらされた。前近代社会に固有の「飢え」からの解放が実現されることになる。また、合理主義の精神は、非合理的な権威の無根拠性を暴き、個人の自由と平等をもとめて前近代的な政治形態や宗教を否定してきた。このような意味において、近代化とは人類社会における「進歩」と考えられる。しかし、人間中心の科学的合理性に根ざしたこの「進歩」の結果として、自然資源の破壊や自由主義市場経済下での貧富の差の拡大といった矛盾が顕在化するにつれて、ばら色の近代神話が崩れ始め、近代的なものの問い直しとなされるようになった。いわゆる「脱近代/ポストモダン (postmodern)」とは、このような成熟した近代社会後の新たな時代を志向する概念である。

一方で、科学技術に裏付けられた交通通信手段の進歩により、世界各地の交流が緊密かつ頻繁となり、15世紀に始まる「大航海時代」以来形成されてきた世界規模の経済システムや社会・文化システムが、より現実的な機能を果たすようになった。20

世紀後半には、コンピューターを介した情報通信技術の革新と資本主義市場経済の進展とが相俟って人類社会の地球規模化が一層顕著になってきた。近代の産物でもある国民国家（nation state）が全体社会の主要な基盤をなしていたのだが、いまや国家を超えた地球規模の多様なネットワークが顕在化し、機能するようになったのである。それに伴って、従来の国家規模の全体社会の中で形成されてきた価値や規範、道徳が相対化され、アイデンティティの流動化、不安定化という現象が見られるようになった。このような人類社会の「地球規模化/グローバル化（globalization）」は、空間軸における社会の変化である。

21世紀初頭の現代を新しい時代とするのは、以上のような時間軸、空間軸における変化、すなわちポストモダンとグローバル化という用語で特徴付けられる現象が顕在化してきたためである。この新しい時代は、今までに見られなかった大きな問題をわれわれに突きつけている。それは、人類がこれまで経験したことのない新たに出現した地球規模の「公共空間」を統べる倫理の問題である。このグローバルな社会・文化システムを貫く一般法則についての探求は、現代の社会諸科学においてようやく緒に就いたばかりである。近代の「大きな物語」（J.-F. リオタール）の中での暗黙の倫理は説得力を失って後退し、未知の巨大な公共空間での人類の共有価値のあり方が改めて問われている。さらにこの延長線上に、西欧起源の近代合理主義を支えてきた理性中心の論理の限界性という問題を挙げることができる。本稿では、西洋の近代化の延長上に位置づけられる現代社会の特質をポストモダンとグローバル化という観点から捉えなおし、その中に潜む問題点を指摘する。そして、この問題解決の方途と関連させて、東アジアに共通する仏教思想の可能性についての試論を提示したい。

（1） グローバル化と近代社会

1：1） 合理主義の精神に裏打ちされた科学技術の進歩と社会体制の変革によって生み出された西洋近代社会は、確かに多くの人々に生活上の豊かさをもたらした。産業革命を経て生産力が圧倒的に増大し、前近代社会に特徴的であった「飢え」や「病」からの解放ということがかなりの程度まで実現された。

他方、資本主義社会体制のしくみは、生産を拡大しその結果産出された商品の需要を掘り起こすという循環過程の中でとどまるところのない発展を遂げるようになる。飢えからの解放、つまり生存のための必要性の充足ということが実現されて後も、生産力の発展はとどまらない。資本主義経済体制を維持していくためには、無限に拡大

生産される商品を購入させるための需要を喚起することが必要である。商品の需要を生み出す前提は、それを必要とする消費者の欲望がなければならない。生存の必要性を超えた時点での新しい欲望の開発が求められるようになる。かくして、より豊かでより快適な生活を求めて欲望を無限に拡大するという消費そのものに価値を見出す「消費社会」が出現することになる。

近代社会の資本主義経済システムは、生産力の発展の結果、需要を超えた供給の増大という大きな壁に突きあたる。この壁を突破するためには、必要性を充したうえでさらにそれ以上の需要の創出が求められる。現代の資本主義システムには、生産とともに需要のための消費の拡大ということが必然的な目標として組み込まれている。消費を推進するためには、人々の新たな欲望の開発、創出が必要である。電子メディアの発達に伴って情報伝達技術が格段に進歩する中で、大量かつ多様な情報が人々の欲望を触発し、新たな消費意欲を生み出すことを可能にした。かくして成熟した近代社会は、大量生産される商品の購買を支えるための消費とそれを裏付ける欲望の無限肥大化という悪循環に囚われるようになった。この大量生産・大量消費の市場経済システムの図式が地球規模で展開され、全世界の人々が否応なしにこの中に組み込まれてきた。経済生活におけるこのようなグローバル化は、社会・文化的側面においても同様に進行している。

いまふれたように、グローバル化の主たる要因の一つとしてコンピュータの技術革新による電子メディアの発達があげられる。メディアの発展史は、M. マクルーハンの区分を用いるならば、音声・文字（活字）・電子と大きく三つに分けることができるが（McLuhan [1964]）、第三段階の電子メディアの出現とその発達は、人間が扱う情報の量と質、そしてその到達範囲を根本的に変容させた。情報の量と規模における無限肥大化という現象は、地球規模のコミュニケーション・ネットワークの形成を可能にした。とりわけ 60 年代頃からコンピュータを通信用回線に連結する技術が発達し、広範囲かつ瞬時の情報交換が可能となった。

電子メディアにおける技術革新が進むことによって、音声のみならず正確な映像も同時に送ることができるようになる。このようなグローバルなレベルでの記号と映像による情報交換は、人間のコミュニケーションの本質や「現実」そのものをも変質させることとなる。元来、人間は信号（signal）とともに言語をはじめとした高度なシンボル性記号を用いてコミュニケーションを行ってきた。人間生活における記号は、その「現実」を構成する不可欠の要素である。しかし、記号化が進展してゆくと、物理的空間と結合した本来の現実とは乖離した「仮想現実」が比重を増してくるよう

なる。人間は記号を用いて具体的現実を再構成し、それによって模擬的な体験をすることができる。記号操作による模擬体験 (simulation) がより精緻化してくると、具体的現実と仮想現実との境界が不分明となり、日常生活における両者の比重が逆転するようになる。この過程で、われわれは個々の身体を基盤とした実態的な欲望とは遊離した欲望を、無限に創出しそれを追い求めていくようになる。記号への反応を伴った人間の消費生活は、情報の電子化と相俟ってとどまるところなく拡大し、複雑化してゆくのである。ただ、元来人間の活動は記号操作と不可分に結びついて形成されており、記号化の質的、量的な程度をもとに、仮想現実と経験的・具体的現実とを区別することは困難である。両者の区分についてはさらに厳密な規定が必要である。

1:2) 電子メディアの発達に伴う情報の量と規模における無限大化は、地球規模での日常的なコミュニケーション・ネットワークの形成を可能にした。ところで、グローバル化 (globalization) とは、国際システム (international system) にかわる地球規模のシステム (global system) が形成される過程を指しており、経済をはじめ諸々の社会関係や文化のシステムが地球全体に拡張していく過程である。つまり、地球規模での相互依存のネットワークがより稠密になることである。これは、資本主義経済の特質に由来する世界規模の経済的相互依存関係の拡大と電子メディアによる情報通信技術の伸展という 20 世紀後半に特徴的な現象とかがわっている。だが当然、それは経済の分野や情報メディアの技術レベルに限定されるものではなく、さまざまな領域で多元的に捉えられる現象である。J. トムリンソンは、グローバル化を近代世界における一つの経験的状況であるとして、この状況に「複合的結合性 (complex connectivity)」という用語を適用し、「文化」との関連での多元的な分析の必要性を述べている (Tomlinson [1999])。 (文化概念に関して、彼は象徴化と意味づけという観点から有効な操作的定義を提示しているが、この問題については別の機会に触れたい)。

グローバル化は、20 世紀初頭の古典的社会学の諸理論のなかにその萌芽がみられるが、60 年代の近代化論から 70 年代の I. ウォーラスティンらの世界システム論の登場を経て、80 年代以降、それは社会理論における主要概念となってきた。A. ギデンスは、グローバル化とはさまざまな社会的状況や地域内の結合様式が地球全体に網の目状に張りめぐられ拡張してゆく過程で、それは近代化の結果と結びついていると考える (Giddens [1990])。ロバートソンはグローバル化を多くの世紀にわたる長いプロセスであるにとらえるとともに、近代化は一元的なものではなく、分岐的、多元的

なものと考えている (Robertson [1992])。ここから、グローバル化現象を把握するための分析枠あるいは準拠枠も多次元的に想定されることになる。ただ、これらの枠組みはあくまで全体としての世界という意識と不可分に結びついて設定されるのである。

初期のグローバル化論争は、ギデンスやマルクス主義理論、さらに機能主義理論にみる人類史の均質的な発展論に対し、ロバートソンらにみられる多元的、分岐的な文明発展論との対比が一つの中心をなしていた。均質的發展論者 (homogenizer) は、一定の世界システム像を設定し、特殊 (particular) のなかに普遍的 (universal) 要素が存在すると考える。したがってそれは、収斂的發展理論を構成する。これに対し後者の異質的發展論者 (heterogenizer) は、普遍－特殊という軸で西欧と他とを配列するのではなく、西欧という特殊なものが他に対して優勢を保持してきたという捉え方をする。現在では、後者の観点がより一般化してきているといえる。

ヒト・モノ・カネ・情報が国境を越えて自由に移動する人類社会のグローバル化は、近代化の世界各地への浸透と考えれば、それは地球上の多くの人々に生活の利便性、効率性、さらに快適性をもたらすという側面を有している。確かに、従来の国境が、社会・文化的、政治的さらに物理的な障壁としての意味を次第に弱め、経済的・物質的豊かさや自由主義、人権尊重といった思想や多様な知識が地球上に広く行き渡るようになってきている。

しかし一方で、豊かな富が公平に人々の間に行き渡るのではなく、一部の多国籍企業の幹部や情報産業のエリートに集中し、一国内および国家間の貧富の格差が増大しているというのも事実である。現在のグローバルな市場経済システムの枠内で利益を得ている層とこれにうまく適応できない層との格差が増大している。実際のところ、グローバルな体験を実感できるのは限られた人間に過ぎない。例えば、日常的に航空機を利用し国境を越えて仕事をするビジネスマンやコンピューターのインターネットを常用する知識人は、絶えずグローバルな体験をしている。しかし、それ以外のグローバルな実体験から縁遠い人々もグローバル化された経済システムや情報システムの桎梏から自由ではありえない。

情報の電子化が進み、主要な経済取引はほとんどコンピューター上の記号のやり取りによってなされる。具体的な取引相手の姿が見えない中での経済活動は、相手に対する配慮や思いやりを欠いたものとなり、利益追求という目的価値のみに支配され、公正な経済活動上の倫理が形成され難い状態になっている。グローバル経済の強者は、自己に有利な経済ルールのもとで容赦なく弱者から利益を収奪してゆく。記号交換に

よる電子取引においては、他者に対する共感や、同情心は介在しない。同時に、あくなき利益追求のための商品の大量生産とそれに伴う大量消費は、自然資源を枯渇させ、深刻な環境破壊という現状を招くことになった。

西洋起源の近代化概念には、進歩という理想が内包されており、それは人類社会すべてに共通する普遍的な過程であるとされてきたのであるが、20世紀後半にいたって、この進歩によってもたらされたものが、富の偏在化と不均衡な人類社会の繁栄、さらに自然資源の消耗と環境破壊でもあることが明らかになってきたのである。

1:3) 人類社会のグローバル化は、一方で、ローカルなものの同時併存性をも明らかにする。このことは、単線的で一方的な時間軸によって人類史を分析してきた尺度とともに、空間的な分析軸の重要性を再認識させることになる。つまり、人類社会の発展様式は一元的、単線的なものではなく、さまざまな空間的布置状況に対応した多元的な分岐状の発展様式をもつものとされるのである。「近代化」の概念も西洋を中心とした一元的なものではなく、「多元的近代化」あるいは「別種の (alternative) 近代化」が問題とされる。これは地球規模の空間を視野に入れることによって、異質な社会の存在を容認することである。理論構成過程で時間性 (temporality) とともに空間性 (spatiality) を考慮することは、「ポストモダン」的とされる現代の社会理論に一般的に見られる特性でもある (Featherstone [2002])。

社会理論において空間要因を重視するということは、多くの近代化論者にみる単線的な進化論ではなく、多元的な人類社会の発展様式を想定するということでもある。M. ウェーバーは、西欧近代社会の本質を組織における官僚制や資本主義経済体制における高度な合理性のうちに求め、人類史を合理化という普遍的過程と重ねて捉えようとした。マルクス主義的な社会理論における包括的な社会変動論 (奴隷制→封建制→資本主義→共産主義) は、生産関係の変化をもとに人類の発展史を時間軸上でとらえようとする試みであった。機能主義的な進化論においても、人類社会が適応機能を段階的に高めてゆくという普遍的な進化過程が想定されていた。このような理論は、西洋を中心に形成された国民国家が人類社会の中心的枠組みの役割を果たしていると考えた時期の近代化論者に共通するパラダイムであった。ところが、グローバル化現象のもとで、西洋社会そのものがローカルで特殊なものであることが明らかになるにつれ、その擬似普遍化による近代化論への反省が生じてきたのである。

元来、グローバルーローカル (global-local) という対称軸は、普遍ー特殊 (universal-particular) という軸と同一視されがちであった。現在グローバルな基準とされている

ものは、事実上、西洋社会に発する科学技術・資本主義経済・政治システム（さらに、消費文化）をもとに一般化されてきたものである。この二つの軸が必ずしも一致しないということが、グローバル化現象が進展する中で顕著になってきた。つまり、特殊であるけれども優勢な要因（dominant particular）のもつ擬似普遍的な側面が、合理化過程における諸矛盾が現出する中で認識されるようになったのである。非西洋社会（アジア圏、イスラム圏等）においては、西洋流の合理主義は必ずしも至上の価値観として受け止められてはいない。この点をさらに突き詰めていくと、西洋近代社会の理念的かつ実体的な基盤をなしてきた「合理性」という概念の再吟味の必要性に行き当たるのである。

(2)近代化と合理性

2:1) 合理性 (rationality) とは、一定の論理形式や効率の有効性、あるいは価値法則といった何らかの道理のもとでの首尾一貫した整合性がみられる状態を指している。西洋の近代化は人間生活の諸領域にわたる合理化過程と重ねて捉えられるが、その合理性の中核をなすものは、科学的合理性である。「合理化」を必然的な過程とする根拠は、人間は生存のための基本的欲求を充足するためにより適切な方法を絶えず追求してきたということ、そしてそれを成し遂げるための能力を有しているということにある。その能力とは、無限に多様な具体的現実を言語のような記号に置き換えて整理、再構成し、これを蓄積していく能力である。記号化は多様な現象のうちから本質的な特性を抽出することでもあり、それは科学的な一般法則の形成へとつながっていく。記号化の能力が人間に固有の文化を生み出すことになるのだが、記号化の過程のなかに合理化の本質を看取することができる。

M. ウェーバー理論に準拠して、S. カルバーグは合理性の類型を4つに整理して捉えている。すなわち、実践 (practical) 合理性、理論 (theoretical) 合理性、実質 (substantive) 合理性、そして形式 (formal) 合理性の4つの合理性である (Kalberg [1980])。

実践合理性とは、日常の限定された生活体験のなかで特殊な目的を達成するための最良の方法を考えることである。これは所与の現実を受け入れた行為者の主観的な枠内での合理性である。他者のより客観的な観点から見て、また別の価値前提からすれば、非合理的 (irrational) または不合理的 (nonrational) とされる場合もあり得る。理論合理性とは、論理的に一貫した認知的方法によって現実を把握し解釈することである。世界の諸現象は有意義な秩序のもとで体系的に捉え得るという信念がその背後

にある。実質合理性とは、一定の文化的価値前提のもとでの諸価値に合致した形で目標を達成するような場合をさす。そのため、異なる価値前提のもとでの合理性は、時として非合理的なものとなる。そして、形式合理性とは、技術的に計算したり推論することができ、一般的、普遍的に適用可能な法則や規則のもとで事象を捉えることである。科学的法則、近代国家の法律、官僚制組織、資本主義経済制度などは形式合理性の顕現とみなされる。西洋における「近代化」は、この形式合理性が生活諸領域全般へ浸透し、拡大していく過程に他ならない。形式合理性の進展によって、実質合理性との矛盾が拡大されるものとして、ウェーバー自身はこの2つの合理性を対比的に捉えている。

2:2) ウェーバーは合理化過程を人類史の必然的な過程と考えたが、これをもっと徹底化した全生活面にわたる合理化を表す言葉として、G. リッツァーによる「マクドナルド化」という概念がある。

マクドナルド化 (McDonaldization) とは、マクドナルドのファストフード・レストランを規定している諸原理が(外食産業以外の)ますます多くの領域で、さらに(アメリカ以外の)一層多くの地域で影響力をもつようになる過程、であるとされる。マクドナルドの原理とは、このハンバーガーのファストフード・レストランの生産と販売過程でみられる効率性、予測可能性、計量可能性、そして正確な技術による制御、という諸特質である。G. リッツァーの「マクドナルド化」論は、M. ウェーバーの近代社会を分析するための合理化論に立脚し、その延長上にポストモダンといわれる現代社会の分析枠組みとして提示された (Ritzer [1993] [1998])。

ウェーバーは、西欧近代社会の本質を組織における官僚制や資本主義経済体制にみられる高度な合理性のうちに求め、人類の歴史を合理化(正確には形式合理化)という観点から捉えようとした。リッツァーはウェーバーの合理化論における官僚制をファストフード・レストランに置き換え、生産面のみならず消費の領域においても合理化過程が浸透してゆくものと考えた。成熟した豊かな近代社会において、人々は、単に生きるための必要性から開放され、新たな欲望に基づく消費面での関心を肥大化させてゆく。「消費文化」が現代社会を特徴づける重要な指標となっているのはこのためである。つまり、マクドナルドのシステムは、近代の徹底化あるいは高度化した状態であるポストモダンの、消費面をも含んだ全生活領域にわたる合理化課程を象徴しているといえるのである。

マクドナルド化理論によれば、人間の社会は進歩の過程で全生活領域にわたり合理

化してゆき、ついには高度な効率性を伴うマニュアル化社会が実現することになる。そして、その結果として、効率性の原理に支配された人間が主体性や創造性を喪失し、リッツァーの言うところの「合理性の非合理性 (irrationality of rationality)」という矛盾した状態に陥ることになる。マクドナルド化は、アメリカ型の消費文化が市場経済の原理に支えられて世界全体に拡散していくというグローバル化現象を象徴しているのであるが、リッツァーはこの現象を、どちらかというところと抗し難い必然的な過程として悲観的に捉えている。それは、アメリカ社会に生きる彼自身が欧米的な観点から人類史を眺めており、アメリカ的生活様式の浸透を不可避のものとして捉えているためである。欧米に一般的な観点から脱すれば、マクドナルド化を完全に阻止することは困難にしてもこれを抑制する方途を見出すことは充分可能であり、人類史の多様な方向性を構想することができよう。(マクドナルド化と日本社会に関するリッツァーの所論とこれに対する日本側の論者の議論に関しては、『佛教大学総合研究所報』No. 21 別冊 [2002] およびリッツァー・丸山 [2003] 参照)。

2:3) 人類社会の合理化過程は、確かに必然的、普遍的側面を備えているといえる。ただ、目的合理性、形式合理性の原理がすべての生活領域に浸透する程度は、文化により社会によって一様ではない。合理性の問題を全体としての「文化システム」との関連で考えてみよう。

「文化システム」という概念は、特定の社会システムの存在を前提として、一定の文化の諸要素が相互関連的なシステムを形成しているという仮定の下に設定された概念である。日本あるいは韓国という国民国家を基盤とした全体社会を一個の社会システムとしてとらえると、それに対応した文化システムが想定される。この場合、システムとはあくまで一定の観点からの構成概念であり、現実を分析するための仮設的図式である。

文化システムの構成要素 (文化の下位システム) とは、個々の特質に応じて分類された文化の内容のことである。人間は、他の生物に比して、外的自然への適応、社会集団の形成と維持、精神的な意味の世界の探求といった多元的な生の営みを行っている。人間における生の多元性にもとづいて、従来の文化人類学や社会学の領域において文化の内容が分類されてきた。ここでは、外部世界を客観的に認識するための科学技術のような認知 (cognitive) 的要素、芸術のような情緒的表現にかかわる表出 (expressive) 的要素、人間生活における望ましい状態を示す価値や道徳といった評価的 (evaluative) 要素、そして限定された状況での生活規範や信念としての実存的

(existential) 要素をあげておきたい。前二者の認知的および表出的要素は、外的な客観的世界との関連性が強く、他の評価的および実存的要素は行為主体としての個人や集団の主観的側面と関わっている。ここから、認知的および表出的要素を文化の外的要素とし、評価的および実存的要素を文化の内的要素として区分することもできる (Parsons [1961])。これらの文化要素が一個のシステムを形成する場合は、諸要素間に相互関連性や相互依存性があると仮定される。例えば、科学技術の進歩は宗教や道徳の内容に影響を与えるであろうし、芸術表現の方法も変化させる。一方で、価値や道徳、宗教は科学的研究の方法や認識対象を制限することもある。

前述の合理性の諸類型との関係を見ると、目的合理性、形式合理性あるいは理論合理性の原理は、認知的要素の基盤をなしている。実質合理性は評価的要素に、実践合理性は実存的要素にそれぞれ対応させられる。表出的要素はこの場合非合理的な範疇に属するものと考えられる (リッツァ・丸山 [2003] 第7章)。

文化のグローバル化を分析するに際して、このような文化システムを構成する諸要素 (cultural elements) の概念を用いると、以下のような仮説が想定される。すなわち、グローバル化状況下で、一つの文化システム内の文化諸要素間で不均衡な発展状態がますます増大している、という仮説である。それは、グローバル化しやすく世界規模で再編される要素とグローバル化しにくくローカルな状態に留まりやすい要素との間で生ずる不均衡である。前者に相当するのは、認知的要素と表出的要素である。後者には、評価的要素と実存的要素が当てはまる。より日常的な用語を用いるなら、認知的要素が優位な文化とは、科学や科学技術がこれに相当し、表出的なものは芸術やアートデザインが、評価的要素が優位な文化は社会的価値や道徳が、そして実存的なものは、特定状況下での限定的な存在者としての個人的な問題解決にかかわる宗教道徳や生活規範が相当する。

認知的および表出的要素は通文化性が強くそのためグローバル化の影響を受けやすい。認知的な科学的知識や表出的な芸術上のスタイルはその好例である。科学的知識は外的な客観世界にその基盤を有しており否定し難い事実を通じてその有用性を理解できる。また芸術的な美も具体的な可視的物体を通じて表現されるため、通文化的な理解が容易である。これに対して、価値や規範のような評価的要素は、なんらかの主体に抱かれた「望ましき」の概念に基づくもので、必ずしも客観的、普遍的な方式で説明できるとは限らない。実存的要素は個人レベルの主観的問題に関わるもので、有限な個人の特定状況と結びついている。したがって、これら内的な要素は異なる社会的状況下にある人々にとっては容易に受け入れ難い特質を持っており、グローバル化

が認知的要素に比して困難であるのはこのためである。

科学技術に代表される認知的文化要素は、その本質からしてもっともグローバル化しやすくしかも累積性の高い要素である。近代社会における主要な国民国家の文化システムにおいて、認知的文化要素が肥大化し他の文化要素を圧倒してきた。この種の合理性があらゆる場面において優先的地位を与えられ絶対化され、その結果、本来手段としての効率性や利便性自体が目的化して、一種の倫理に転化するという事態が現れている。科学万能主義や経済的効率性を至上価値とする考え方はその好例である。

(3) 新たな知の形成

3:1) 合理性とは、一定の論理形式や効率性、手段の有効性あるいは価値原理といった何らかの道理のもとでの一貫した整合性がみられる状態を指すものであった。この場合、目的に対する有効な手段についての目的合理性、あるいはその一般化という意味での形式合理性と、特定の価値や信念のもとでの価値合理性または実質合理性とではその意味内容は異なり、時として、両者は相矛盾することがある。

客観的、一般的な法則のもとでの整合性を備えた目的合理性や形式合理性の観点からすれば、特定価値のもとで効率性や手段の有効性を顧慮しない価値合理性は非合理的とみなされる場合もある。学問における合理性に関しては、西欧近代の自然科学に代表されるように、その論理構造の根底には目的合理性、形式合理性の原理が横たわっている。学問の中立性とは、客観的な法則の確立を目指して、特定の価値からの自由である状態を意味するものであった。

科学技術の発達に象徴される目的・手段的な合理性の浸透、つまり合理化の進展は、人類社会の物質的生産力を増大させ、人間生活を豊かにした。近代化とは、科学技術の発達による豊かな生活の実現であり、人々を飢えや病から解放することでもあった。この限りにおいてそれは、前近代社会と比して、人間社会の進歩を意味している。合理化を人類史の必然的な発展過程として、しばしば近代化と合理化とが重ねて捉えられるのはこのためである。

科学技術が自然の資源を活用し、豊かな人間生活を実現していくなかで、この種の合理性が絶対化されてきた。しかし、自然科学をはじめとした西洋近代の知識体系は、人間生活にとっての有効性という暗黙の前提のもとで構成されており、それは本質的な意味において価値自由とはいえない。人間中心的な価値観のもとで自然が利用され開発されてきた結果、自然資源の有限性が明らかになってきた。自然資源をエネルギー

に転換して消尽することは、人間自身を包摂している自然環境の破壊でもある。科学的合理性に支えられた人間中心主義の伸展は、客体としての他の生物や自然に対する相対的な優位を保つことに過ぎない。それは、合理性の追求の果てに、人間自身を包む生活環境全体の破壊という非合理的な状況を招くことになる。

先に述べたように、人間生活における合理化は、人間の記号操作能力と深い関係がある。具体的現実を言語のような記号に置き換えて把握するという事は、現実の対象から得られる直接的印象を、抽象化、一般化の作用を通して一定の記号に転換することである。人間は外界の事象を感覚器官を通した刺激として受け止めるが、この感覚は人間に固有の高度な神経系のメカニズムに媒介されて、知覚表象として認識される。外的刺激による感覚が知覚に転ずるということは、新たな「指示対象—記号」連関への転換ということであり、具体的現実を言語のような記号に置き換えるということである。知性とは、この知覚をもとに外界を認識する精神機能を指しており、それは自然科学を始めあらゆる学問の根底をなしてきた。知性、あるいは理性にもとづく外界の認識作用は、対象を一般化された記号に置き換えることであり科学的な法則の発見につながっていく。自然科学の発達には、知性や理性の働きを絶対化し、一方で感覚と強く結びついた感性を非合理的なものあるいは非条理なものとしてきた。科学的な概念構成物が、具体的現実に優先して実体化されて捉えられているのである。

しかし、記号化は本来無限の多様性をもつ現実を有限な記号に置き換えて再構成するということでもある。理性中心の科学万能主義の根底には、記号化によって万物の本質を整除して捉え、すべてを計算可能な状態に置き換えうるという楽観的な考えが潜んでいる。その極にあるのが、コンピューターにおけるデジタル化であり、これは二進法の枠にすべてを置き換えて一般化することである。

3：2) 西洋に端を発する近代の知の限界が見えてくる中で、これに代わるあるいはこれを修正補完するものがいま求められている。このようななかで、非西洋圏の伝統文化である仏教思想の可能性が再認識されようとしている。ここでは、非西洋の東アジア圏において形成されてきた仏教思想の可能性について考えてみたい。

仏教は、インドから中国、朝鮮を経て日本に伝播される過程で、各地の土着文化と融合し、それぞれ固有の宗教として発達してきた。日本においては、神道をはじめとした固有の文化と並存、融合して日本独特の仏教を発展させてきた。日本化した仏教、つまり日本に土着化（当時のグローバル文化がローカルな場に定着するという意味でのグローカル化（glocalization）した仏教は、日本固有の特質を持つと同時に、

他の中国や朝鮮、韓国の仏教と共通の通底要素というべきものも備えている。西洋の近代知が問い直されているいまこそ、仏教思想における地域と時代を超えた「絶えざる再解釈に堪える」普遍的要素（池見他編 [2003]）の再認識がなされねばならない。また、日本に土着化した仏教は、日本固有の社会・文化的文脈においてその「心身の具体にとって主体的に受容」されることにより、新たな要素を創出してきたと考えられる（藤本 [2003]）。

西洋流の近代知が形成される暗黙の前提としての人間中心主義に対して、日本の仏教においては、人間は万物の中の一個の存在として位置づけられる。人間以外の他の生物や自然は人間の利用対象として客体化されるのではなく、人間と同等の存在価値がみとめられる。例えば、日本における「本覚思想」は、仏教の持つ普遍的特質と日本的要素の融合したものであるが、西洋近代の人間中心主義を超克して自然との共生を可能にする思想ともいえよう（池見他 [2003] p122「特論」）。

インドにおける初期仏教が特定の教理体系をもたず、もっぱら理想状態へいたるための宗教的実践を重視したのは、仏教の教祖である釈迦牟尼自身が、抽象的な思想や論理のもつ一面性や相対的性格を十分認識していたためではないであろうか。この場合の理想状態とは、本来無常で変化する対象に固執する主体としての自我を否定し、人間の欲望の無限拡大とその充足ということが無意味なものとする状態のことである。ここでは、主体－客体という二分法が否定されることになる。つまり、人間主体の欲望を充足し、生活の最適状態を実現するために客体としての自然界の万物を利用するという、西洋近代の思想とは根本的に異なるものである。

近代に特徴的な人間社会の合理化をもととした「進歩」の概念は、人類の歴史を直線的な発展の形で捉えている。ここから、無限の資源の利用とその使い捨てという考え方が出てくる。科学技術が高度化した現代では、利用すべき資源の有限性と廃棄物処理の限界性が明らかになっている。この中で、仏教の「輪廻転生」という循環的な発想や、真の原因・結果関係という意味での「因果応報」思想のもつ妥当性が理解できる。

人間の道具としての科学技術は、人間中心の価値前提の下で、対象を固定化して一定の枠内での原因と結果を分析し解明してきた。その中で、人間にとって利用可能で有効なものを生み出す方法が発見され、法則化されてきた。それは、より広い全体枠においては他の生物や自然に対して悪い結果をもたらすことがある。石油エネルギーの使用による人間にとっての快適な生活の実現は、大気のアゾノ層破壊という結果を招いた。近代医学における治療は、病気の原因を限定し、集中的にその原因、たとえ

ば病原菌，を消滅させることにある。それは大きな治療効果をもたらしたが，一方で新しい耐性菌を生み出すことにもなった。また，局所的な人体の病気治療は，さまざまな薬による副作用を誘発し，全体としての人体の生命力を奪うことにもなる。このような局部的に限定された原因—結果の解明は，本来実体でないものを記号化，言語化を通して事実上実体化することによって限定的な法則定立を目指す近代科学の方法とかかわっている。これに対して，仏教の「縁起」の思想は，万物の大きな全体の流れと有機的な関連の中で事象を捉えようとするものである。（仏教と現代医療の問題については、『佛教大学総合研究所紀要別冊』（2003年3月）および『総合研究所報』（22号～24号）における共同研究班（村岡班）の報告を参照）

いま瞥見してきた仏教思想の特質は，日本仏教の持つ一面に過ぎないかもしれないが，中国や韓国の仏教にもそれぞれの独自の特性と結合した普遍的に通底する要素を見出すことができよう。

仏教の思想は，狭い意味での価値関係的な教義の範囲を超えて，学問の認識論にもおよぶ新しい知識体系の形成にかかわる可能性を有している。すなわちそれは，人間中心の近代西洋の知を超えた，人間観，社会観，自然観を提供するものとなろう。

※平成15年10月28日，29日に開催された第18回国際仏教学術会議（佛教大学・韓国圓光大学校共催）において，「新しい時代の知と仏教—ポストモダンとグローバル化のながれのなかで」と題する基調講演を行ったが，本稿はその講演草稿を加筆修正したものである。講演内容がこれまで述べてきた本研究所の目指す研究目標（『総合研究所報』18，19，20，21，24の各号における拙稿参照）とも関連する側面が強いので，編集会議の了承を得て本誌に掲載した。

なお，本稿は，平成15年度佛教大学特別研究費助成による研究成果の一部でもある。

文 献

Featherstone, M., 2002, Globalization Beyond the Nation-State and Marketization: the Problem of an Ethics for a Multicultural World, *Bulletin of the Research Institute of Bukkyo University*, No.9. March 2002.

『佛教大学総合研究所報』No.21 別冊，2002。

藤本浄彦，2003，『法然浄土教の宗教思想』平楽寺書店。

Giddens, A., 1990, *The Consequences of Modernity*.

松尾精文・小幡正敏訳，1993，『近代とはいかなる時代か？』而立書房。

池見澄隆・斉藤英喜編著，2003，『日本仏教の射程：思想史的アプローチ』人文書院。

- Kalberg, S., 1980, Max Weber's Types of Rationality: Cornerstones for the Analysis of Rationalization Processes in History, *American Journal of Sociology*, 85-5.
- McLuhan, M., 1964, *Understanding Media*.
- 栗原裕・河本仲聖訳, 1987, 『メディア論』みすず書房。
- Parsons, T., 1961, Introduction to Part 4 (Culture and the Social System), in T. Parsons and others (eds.), *Theories of Society*.
- 丸山哲央訳, 1991, 『文化システム論』ミネルヴァ書房。
- Ritzer, G., 1993, *The McDonaldization of Society*.
- 正岡寛司監訳, 1999, 『マクドナルド化する社会』早稲田大学出版部。
- , 1998, *The McDonaldization Thesis: Explorations and Extensions*, London: Sage.
- 正岡寛司監訳, 2001, 『マクドナルドの世界—そのテーマは何か?』早稲田大学出版部。
- Tomlinson, J., 1999, *Globalization and Culture*.
- 片岡信訳, 2000, 『グローバリゼーション』青土社。
- ジョージ・リッター・丸山哲央編, 2003, 『マクドナルド化と日本』ミネルヴァ書房。
- Robertson, R., 1992, *Globalization: Social theory and Global Culture*.
- 阿部美哉訳, 1997, 『グローバリゼーション』東京大学出版会。